

国立国語研究所学術情報リポジトリ

次元形容詞はどんなときに使われるか：
日本語とスペイン語の対照研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): dimensional adjectives, polysemous, contrastive analysis of Spanish and Japanese language, double subject sentence, metonymy 作成者: 西内, 沙恵, NISHIUCHI, Sae メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001420

次元形容詞はどんなときに使われるか

——日本語とスペイン語の対照研究——

西内沙恵

国立国語研究所 研究系 理論・対照研究領域 非常勤研究員

要旨

次元形容詞として、日本語には「高い」が、スペイン語には「alto」がある。「あの弁護士は背が高い」のように、日本語では次元的意味を表出するために二重主語文の構造が必要となる場合がある。一方、「alto」は興味深い通時的意味変化を遂げた多義語であるが、「高い」のような文法的制約を持たない。これらの形容詞の多義の表出について、文法と意味の関係から考察をまとめ、その使われ方の相違を対訳本の調査から分析する。一方の言語で高さを表す形容詞表現が、叙述用法ないし修飾用法で使われている場合に、もう一方の言語でどのように表されているかを観察し、日本語とスペイン語の高さを表す表現の違いを明らかにする。調査の結果、「高い」の使用には叙述用法が多く数えられた。対して「alto」は、修飾用法による次元性以外の意味表出の使用が目立った。日本語の次元的な意味の表出に、二重主語構文にかかる換喩の特性が関わっていることを指摘し、様々な文法現象の成立にかかる換喩現象が、日本語とスペイン語の形容詞の意味表出にも関わっていることを提言する。このことから、それぞれの言語の異なる語彙で、共通の枠組みが表現に反映されていることを考察する。また、形容詞の類型論的分析には研究の蓄積があり、日本語の叙述傾向と印欧語の修飾傾向が示されている。本研究では多義性の観点からこの傾向の成立を再考する*。

キーワード：次元形容詞、多義性、日西対照、二重主語構文、換喩

1. この研究の目的

形容詞を品詞として積極的に認める立場に立ったとき、いかなる言語でも次元性 (DIMENSION)・年 (AGE)・評価 (VALUE)・色彩 (COLOUR) の四つの意味の要素がとり出せる (Dixon 2004)。類型論的に普遍的な意味の要素の一つである次元性を表す形容詞として、日本語には「高い」などがある一方、スペイン語には「alto」がある。日本語の「高い」は、「低い」、「安い」などの複数の反義語を持つ多義語であり (国広 1982)、被修飾名詞の次元性を表出する際に、(1) のように二重主語文という構造が必要となることがある一方、「alto」はその限りでない。従来形容詞は結合する名詞との関係において意味が分析されることが多かった。本研究では、文法と意味の関係から語の多義性の表され方を探り、両言語での使われ方の相違の分析を試みる。(例文で使用了グロス凡例は稿末に一覧した。)

- (1) a. [?]彼女は高い。
b. 彼女は背が高い。

* 本論文は、第 162 回 NINJAL サロン (平成 29 年 6 月 27 日開催) で発表した内容に加筆修正をしたものです。発表の際、多くの方から有益な助言を賜りました。ここに改めまして心よりお礼申し上げます。

- c. Ella es alta.
 3SG.she V.IND.3.SG.PRS.be ADJ.tall
- d. *Ella tiene estatura alta.
 3SG.she V.IND.3.SG.PRS.have N. height ADJ.tall

対訳本を対象に調査したところ、日本語とスペイン語に共通する用法である修飾用法と叙述用法の使用数に差がみられた。一方の言語で高さを表す形容詞が叙述用法ないし修飾用法で使われている場合に、もう一方の言語でどのように表されているかを観察し、日本語とスペイン語の高さを表す表現の違いを明らかにする。この観察と分析を通して、両言語とも形容詞の意味表出に換喩の特性が関わっていることを提言する。また、形容詞における日本語の叙述傾向と印欧語の修飾傾向（松本 1998, 仁田 1998, 八亀 2008）の要因を、多義性の観点から再考する。本研究では「高い」と「alto」の対照から、次の（2）から（4）のことを示し、（5）を明らかにする。

- (2) 表す意味：「高い」と「alto」がそれぞれどのような意味を持っているか。
 (3) 表現の文法的制約：「高い」と「alto」にどのような文法的制約があるか。
 (4) 表現の用法：「高い」と「alto」が修飾する対象に対してどのような位置に置かれるか。
 (5) 表現の運用：「高い」と「alto」がどのようなときにどの程度使われるか。

2. 日本語の次元形容詞の意味用法

2.1 「高い」の意味

それぞれの言語における高さを表す表現の意味用法を概観する。まず、日本語の「高い」の使われ方をみる。

空間的な特性をその中心義とする次元形容詞の記述・分析は、宮島（1962）、服部（1968）、国広（1970）、西尾（1972）、久島（2001）など数多く、複数の次元形容詞の意味範疇が体系的に捉えられ、まとめられている。次に、「高い」とその周辺の次元形容詞の扱われ方を、先行研究をもとに概略する。次元形容詞には「長い」なども含まれるが、「長い」や「大きい」が物自身の性質を表すのに対して、本研究で扱う「高い」は物自身を持っている量的な性質もほかの物との関係的な位置も表す。すなわち、「高い」は「基準面から上向きの方に存在する長さ」（西尾 1972: 71）を「人が存在し活動する場」（久島 2001: 24）で表しうる。〈次元性〉以外には、「温度」、「割合」、「血圧」などの〈度合いの拡張性〉、「評判」、「悪評」など上方向に限らない方向への拡張を表す〈範囲の拡張性〉、「値段」、「地位」などの〈価値の保有性〉、「意識」、「格式」など抽象的なものの〈程度の大きさ〉といったスケール性に準じた比喩的な意味を持つ。被修飾名詞そのものの意味の抽象性に関係なく、「位」、「度」、「率」などのスケール性をもつ接尾辞がつく名詞をよく修飾し、そのスケールの大きさを表す（IPAL, 西内 2017）。また、(6) のように「声」や「音」といった対象では、「音程」、「音量」という異なる度合いの大きさも表しうる。（例文中の下線は筆者による。）

- (6) a. 母は色が白くて、とても声が高くて、ふわっとした体つきをしていて、ちょっと太めの腰をしていた。 (吉本ばなな『デッドエンドの思い出』 p. 111)
 b. 波の音が昨夜より高い。 (川上弘美『真鶴』 p. 6)

このほか、「身の程をわきまえず無礼だ、ひれ伏せよ」という意味の「頭が高い」、「自慢に思う」という意味の「鼻が高い」、「心理的な抵抗があって訪問しづらい」という意味の「敷居が高い」などの慣用用法があるが、いずれも次元的な際立ちが目立つ事態や状態と、その際の心理的な描写が結びついた表現と考え、ここでは大きく取り上げない。なお、心理的な意味を表さず、大きな鼻を描写する「鼻が高い」という表現は、鈴木 (1967) によれば民族的価値観の反映である。顔面から垂直上方に突き出た状態を描写するのに「出」(出っ歯)や「長い」(顎が長い)が用いられる他の部位と違って、鼻に「高い」が用いられるのは、鼻の隆起に対する日本人の民族的価値観が修飾語の選択に関わっていると考えられる。

副詞用法では、(7) のようにプラスのイメージで用いられる (飛田・浅田 1991: 336) が、本研究では副詞用法の制限には立ち入らない。

- (7) a. こちらは袋を開けたとたんに芳香が広がり、お湯をさすとさらに高く香る。
 (杉浦明平『日本の名随筆 (94) 草』 p. 197, 作品社, 1990)
 b. *トイレが高くにおう。 (飛田・浅田『現代形容詞用法辞典』 p. 336)
 c. トイレが強くにおう。 (飛田・浅田『現代形容詞用法辞典』 p. 336)

2.2 「高い」の用法と制約

日本語の形容詞には叙述用法と修飾用法があり、「高い」はいずれの用法でも用いられる。制約として、前節でみてきた「高い」の多義を表出する動機づけが被修飾名詞の性質だけでなく、主格を明示する二重主語文という形容詞の文法構造にもあることが西内 (2016) で述べられている。次元形容詞「高い」文では、〈次元性〉の意味を表すために、(8b) (9b) (10b) のように部分を示す主格を補完しなければいけないことがある。

- (8) a. 高い弁護士 b. 背が高い弁護士
 (9) a. 彼女は高い。 b. 彼女は背が高い。 ((1b) 再掲)
 (10) a. その靴は高い。 b. その靴はヒールが高い。

(8a) のように被修飾名詞「弁護士」を「高い」単独で修飾した場合、「雇うために高額を要する」という意味になる。(9a) でも「彼女とデートすると、いい店に行かなければならず、高くつく」といった読みや「彼女がサービス業に従事していて、そのサービスを受けるために高額を要する」といった〈価値の保有性〉の読みはできるが、〈次元の意味〉の読みはまずできない。「弁護士」及び「彼女」の次元性を表すためには、(8b) (9b) のように「背」という〈次元性〉を受ける部分を明示する必要がある。同様に、(10a) も「靴の値段が高い」という〈価値の保有性〉を意味する。「靴」のヒールの高さという〈次元性〉の表出には、(10b) のように「靴」を主題化し、〈次

元性〉を受ける「ヒール」の部分をガ格で指定する必要がある。この文法的な意味の制約は、被修飾名詞の場所的特性の条件のもとで起きると考えられる。

名詞の場所性は、日本語文法において重要な問題として扱われてきた特性である。まず、寺村(1968)で名詞の場所性を文法的に検証するテストとして、(11)から(13)に名詞を当てはめる手法が編まれた。

(11) ココハーデス

(12) -ヘイク

(13) -デ〜シタ

さらに、田窪(1984)で名詞の意味の面から(14)から(18)のように分析された。

(14) 「のところ」がつかない。

(15) 「どこ」できける。

(16) 移動の goal, source になる。

(17) 場所の状況語句「NPで」のNPになれる。

(18) 存在を表す文において「位置」を表す「NPに」のNPの位置に現れる。

田窪(1984)で確立されたテストフレームに語用論の観点を取り入れた森山(1988)では、「場所名詞」が何にとつての「場所」であるかを観点に、場所的特性が名詞の素性として固定的に捉えられるものではないと考え、基準の精緻化が試みられた。使われる環境での名詞の振る舞い、その相対性への着目の必要性から、場所名詞の定義として(19)から(21)の三段階を、田窪(1984)の定義に整合性のある形で加えている。

(19) 絶対的場所名詞：地名・集団・組織などの、どんな場合にも場所としてしか使われない、場所化されない名詞

(20) 相対的場所名詞：語用論的な相対性の観点が必要とされる「家」、「机」、「車」のような、一定の空間を有する実質名詞

(21) 絶対的非場所名詞：一般的に場所性がない「青さ」、「正義」のような非実質的な名詞

(19)でいう場所化とは、場所の限定が広がる「ところ」などの名詞を付与することを指す。トコロ付与による場所化は、付与された対象の「辺り一帯」を取り上げ場所にしたり、場所名詞に付与された場合はその場所の限定を広くしたりする。また、方向を表す「前」「後ろ」「左」「右」「方」などの相対名詞(奥津1974)も、ある方向に位置する任意の場所を指定する点で場所化成分として扱われる。

絶対的場所名詞は、久島(2001: 17)のいう「周囲の自然と一体で、独立していないもの。人や物が存在するための空間を持つ」物にあたると考えられる。対して、相対的場所名詞は「周囲から独立していてまとまりがあるが、人や物が存在するための空間を持つ」物に対応づけられる。森山(1988)は日本語の移動・方向の表現を考察するのに場所名詞への言及を要し、久島(2001)

は形容詞の体系の整理にあたって空間性を分類した。それぞれ狙いが異なるが、場所的特性を捉える上で有用な観点を提示している。

しかしながら、森山（1988）の三段階には、実質名詞でありながら空間になりうる「相対的场所名詞」と、非実質名詞の「絶対的非場所名詞」との間に、「人」や「猫」などのトコロ付与で場所化できる名詞の区分が抜け落ちている。田窪（1984）の定義は、名詞の中でも「場所名詞」だけの素性を考えているため矛盾がないが、森山（1988）の定義は場所性がないものも分類しようとするものであるため、トコロ付与で場所化される実質名詞も段階に加える必要がある。また、「絶対的场所名詞」に設定されている条件の「地名・集団・組織」は、固有名詞が多く含まれ場所以外の要素を想起させやすく（野矢 2011）、必ずしも場所性を持って扱われるとは限らない。これらの理由から、森山（1988）にもう一段階を加えた次の四段階を暫定的に設定する。

- (22) 絶対的场所名詞：どんな場合にも場所としてしか使われず、場所化されない、周囲の自然と一体で独立していない名詞で、人や物が存在するための空間を持つ。
- (23) 相対的场所名詞：周囲から独立していてまとまりがあるが、語用論的な相対性の観点から一定の空間を有する実質名詞で、人や物が存在するための空間を持つ。
- (24) 相対的非場所名詞：トコロ付与で場所化される、空間を有さない実質名詞
- (25) 絶対的非場所名詞：どんなときにも場所性がなく、場所化されない非実質的な名詞

森山（1988）の三分類にもう一段階加えた分類基準に、久島（2001）の定義をかけ合わせた（22）から（25）を本稿での場所名詞の定義とする。

次元形容詞「高い」の〈次元的意味〉とそのほかの意味の表出の条件を、被修飾名詞の場所的特性と、次元際立ちを受ける部分の二重主語文による主格明示の文法的制約から表 1 にまとめた。以下で事例とともに、この構造をみてみよう。「高い」を一重線で、被修飾名詞を波線で示している。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）から抽出された用例には、サンプル ID を付記している。

表 1 場所的特性を基準とした用法の区分

被修飾名詞 表出する意味	場所性アリ	場所性ナシ
	直接修飾	ガ格の補完
〈次元的意味〉	直接修飾	ガ格の補完
〈次元性〉以外の意味	相対的场所性は 直接修飾が可能	直接修飾

表 1 の左上：直接修飾による〈次元的意味〉の表出

(26) (27) のように被修飾名詞が絶対的な場所性を有する場合、主格によって部分や属性を明示しなくとも〈次元的意味〉が表されている。また、(28) (29) の被修飾名詞は絶対的场所名詞ではないものの、(28) の「柵」は人がもたれかかることができる場所を提供し、(29) の「波」はサーフィンで思い浮かべられるような人を巻き込む空間を持ちえ、相対的に場所性を有する名

詞に分類できる。この場合も、〈次元的意味〉の表出に主格の補完を要さない。

- (26) ステージが高過ぎて、センター席からは中央ステージすらよく見えないような状態。
(BCCWJ サンプル ID : OY04_03908 Yahoo! ブログ)
- (27) 空が高い。白い鳥も消えていた。
(BCCWJ サンプル ID : PB19_00658 川端裕人『ニコチアナ』)
- (28) 鳥は垂直には飛べませんから、柵が高ければ逃げられなかったと思います。
(BCCWJ サンプル ID : OC12_00838 Yahoo! 知恵袋)
- (29) 晴れて穏やかに見える伊勢湾も、外洋の波が高いときはそのウネリが湾内に入ってきます。
(BCCWJ サンプル ID : OY14_29732 Yahoo! ブログ)

表 1 の右上：ガ格の補完による〈次元的意味〉の表出

(30) は主題化されるはずの「鼻」の所有者が明示されていないが、主題である「人」が場所性を有さないために、〈次元的意味〉の表出に対象のガ格による明示が必要になっている。(1) 及び (8) から (10) でみた構造も、この枠組みで同じように説明できる。

- (30) 眼は細いのだが、鼻が高いので、顔が引き締まって小さく見える。
(BCCWJ サンプル ID : LBj9_00218 曾野綾子『極北の光』)

表 1 の右下：直接修飾による〈次元的意味〉以外の表出

(31) (32) のような場所性を帯びない名詞が被修飾名詞のとき、〈次元的意味〉以外、ここでは〈程度の大きさ〉と〈価値の保有性〉の意味が立ち現れている。

- (31) 給湯床暖房とこの断熱法を併用するとより暖房効果が高くなります。
(BCCWJ サンプル ID : LBg5_00034 濱口和博『プロも見落とす家づくりの急所』)
- (32) ホッキ貝 (三百十五円) より赤貝が高いとはね。
(BCCWJ サンプル ID : OY03_01717 Yahoo! ブログ)

表 1 の左下：相対的场所名詞の〈次元的意味〉以外の表出

(33) では被修飾名詞が場所性を帯びているのにも拘らず、〈次元的意味〉が表出されない。これは、「アパート」が住む場所であると同時に、所有の対象としての物にもなりうる相対的场所名詞であることに起因すると考えられる。

- (33) 諸事情があり実家には戻れない。選択肢として、1. アパートが高くても都内に住んだ方がいい。2. 何があってもすぐかけつけられる (略)
(BCCWJ サンプル ID : OC04_01022 Yahoo! 知恵袋)

なお、上の条件に当てはまらない実例も存在する。(34) (35) は、被修飾名詞が場所的特性を帯びていないが、〈次元性〉を受ける部分の明示なしに〈次元的意味〉を表出する用例である。(34)

の被修飾名詞「枕」は、人の身体において重要な部分である頭を支えるものであることから、人が存在するための空間を提供するとも考えられるが、やはり「頭」は身体の一部に過ぎず、人そのものが存在するための空間を持つ場所的特性を備えているとは考えにくい。(35)の被修飾名詞の「積み木」は、上方向への際立ちを成立させる物ではあるが、人や物が存在するための空間を提供するような場所にはならない。主格の補完なしに〈次元的意思〉を表出する名詞の素性は、場所的特性への言及だけでは不十分であり、さらなる精緻化の余地がある。

(34) ちょんまげ時代の人は、枕が高くてもちゃんと眠れたのでしょうか？

(BCCWJ サンプル ID : OC12_03936 Yahoo! 知恵袋)

(35) そうすると、その積み木が高くなるにつれ、不安定になって、そのうちには崩れますね。

(BCCWJ サンプル ID : OC12_06260 Yahoo! 知恵袋)

以上、「高い」の多義の表出を動機づける要因を、被修飾名詞の場所的特性と形容詞の二重主語構文から導かれる文法と意味の関係にみてとり、次のことを示した。

(36) 表す意味：「高い」は、〈次元的意思〉のほか、スケール性に基づく多義を持つ。

(37) 表現の用法：「高い」には、叙述用法と修飾用法がある。

(38) 表現の文法的制約：「高い」は、〈次元的意思〉の表出に二重主語構文の制約を持つ。

3. スペイン語の次元性を表す表現

3.1 スペイン語の形容詞用法

日本語の形容詞が、その用法の別から属性形容詞と感情形容詞に分類されるように、スペイン語の形容詞もスペイン語学において独自の体系を築いている。この節では、スペイン語形容詞の様相を、Demonte (1999) を参考に概観する。スペイン語の形容詞には、日本語や英語の形容詞と同じように、修飾用法と叙述用法がある。英語と大きく異なるのは、名詞の性と数に合わせて語形が曲用する点と、修飾用法に前置と後置の二つの方法がある点である。スペイン語学における形容詞の分類は、表2のようにまとめられる。

表2 スペイン語形容詞の分類

分類 用法	限定形容詞	叙述形容詞	
		分類形容詞	品質形容詞
修飾用法	○ (前置)	○ (ふつう後置)	○ (前置 / 後置)
叙述用法	○	○	○
比較用法 / 程度副詞修飾	×	×	○

限定形容詞には、指示形容詞・所有形容詞・数形容詞・不定形容詞・疑問形容詞・関係形容詞が含まれ、修飾用法では一部の例外を除き名詞の前に置かれる。叙述形容詞とは、限定形容詞ではないもので、さらに分類形容詞と品質形容詞に二分される。分類形容詞は、修飾する名詞を任

意のグループに分けるもので、地名形容詞とも呼ばれる。「de (英語の of に相当) + [名詞]」に対応し、多くは日本語の「～の」、「～的な」で訳される。品質形容詞は、修飾する名詞の性質や状態を示す形容詞で、「excelente (excellent)」、「magnífico (magnificent)」、「maravilloso (marvelous)」などの最上級の評価形容詞も含まれるが、多くの場合は比較表現ができ、程度の副詞で修飾できる。品質形容詞は、名詞の前に置かれる場合と名詞の後に置かれる場合がある。分類形容詞は「～らしい」という意味で対象の性質を表し、品質形容詞のように使われることもある。また、「fantástico (fantastic)」のように「空想上の」という分類形容詞としても、「すばらしい」という品質形容詞としても使われる多義的形容詞もある。分類形容詞は、比較構文や程度副詞を伴って用いることができない点で、用法上の区別がある。

品質形容詞の修飾用法では後置修飾がニュートラルで、前置修飾されるときは、説明的になったり、感情・評価・強調の意味が込められたり、詩的な響きがかもされたりと特別なニュアンスが付加される。また、前置と後置で意味が全く異なる場合もある。Hanssen (1913: 181) によれば、後置修飾は客観的性格、前置修飾は主観的性格を示す。このほか、後置修飾は関係節における制限用法、前置修飾は非制限用法に由来すると考える見方もあるが、後置修飾にも非制限的な用法があり、必ずしも二項対立的でない (Luján 1980)。

3.2 スペイン語の次元形容詞の意味と用法

本節では、スペイン語の高さを表す表現の意味の広がり概観する。スペイン語では、上方向への際立ちは「alto」で表される。なお、「grande (大きい)」も類似した場面で用いられ、対象の次元の際立ちを表す。日本語や英語では、「高い」と「大きい」は使い分けられるが、フランス語では人の背の高さを表す際、「grand (大きい)」が使われるため、違いを確認しておく。これらの形容詞は、使用場面の類似から意味が重なっているようにみえるが、日本語やスペイン語では「大きい」は総面積の、「高い」は上方向への異なる次元の際立ちを表す形容詞である。このほか、高さを表す意味の区分について、日本語の「高い」と英語の「high」及び「tall」を対照する研究に服部 (1968) がある。本稿では、スペイン語には空間的な上方向への際立ちを表すのに「grande (大きい)」と意味範囲を共有していない点、英語の「high」及び「tall」のような使い分けがない点に触れるにとどめておく。

「alto」は多くの意味を持ち、形容詞の語義として、スペイン語の代表的な辞書 DRAE で 25 もの意味が、例文が実例で構成される辞書 DEA で 15 の意味が描かれている。このほか、名詞用法や副詞用法として使われる語義もある。意味の理論的な問題点について、「alto」への観察を通して多義の構成を論じる研究に Sato (1990) がある。Sato (1990) は、慣用用法や比喩的な意味は基本的な意味から推論される点で、母語話者の直観に沿ってはいるが、意味論的記述の実際的な問題に明確な説明を与えてくれるわけではないことを次の例とともに考察している。社会的なヒエラルキーにおいて高いところに位置することから「alto」が使われる「las altas esferas (*the high sphere) (上流階級)」や、水が増え水位が上がった状態が次元的なスケールで表される「La mar está alta. (*The sea is high.) (海が荒れている)」、時間が終わりに近づく様が時間スケールに

見立てられた「las altas horas (*the high hours) (夜更け)」などといった用法の解説は、「alto」の語単位での意味の獲得を網羅的に説明してくれるものではない。なお、上の例は、日本語では「上」や「深い」で、英語では「up」で表されるところだろう。「alto precio (high price)」の例では、値段が数値として垂直方向に積み上げられるスケールで視覚的に測りうるものなので、上方向への際立ちを表す「alto」が用いられることの必然性が見えやすく、上の三つの例でも同様の見立てがほかのスケールに反映されているとも考えられる。Sato (1990) は、視覚的認知と言語表現の関係性を認めながらも、多様な比喻用法を持つ語が有する特性や、多義の自然な派生に関心を向け、語単位で獲得された意味に着目している。語が潜在的に有する意味と、多様な文脈を経て慣習化された意味変化から、多義がどのように自然に派生してきたのかを「alto」への観察を通して次のように論じている。「alto」の語源であるラテン語「ALTUS」が「alto」の多様な意味の全体的な動機づけとなり、通時的な意味と共時的な意味を構成していることを分析して描かれた意味関係が図1である。

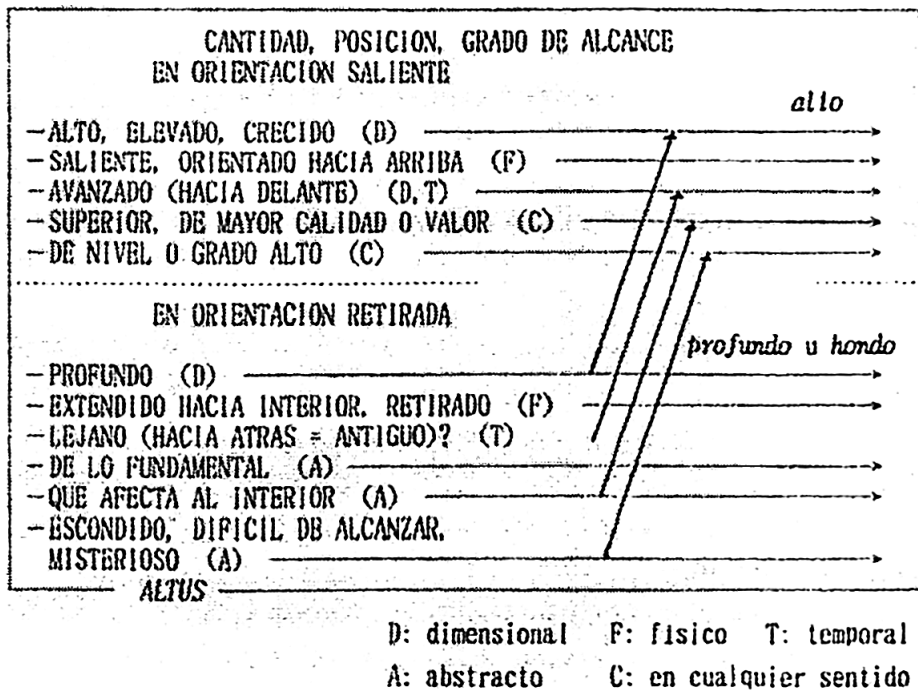


図1 量・位置・度合いの際立ち (Sato 1990: 82)

図1では、「ALTUS」が持っていた意味が〈次元的意味 (D)〉、〈位置の描写 (F)〉、〈時間的意味 (T)〉、〈抽象的意味 (A)〉、〈度合いの拡張 (C)〉に分かれ、「alto」と、類義語の「profundo (deep)」及び「hondo (deep)」のそれぞれに継承された意味の関係とその対比が示されている。この図から、感情の振幅や謎めいていて分からない様を表す〈抽象的意味 (A)〉を「profundo」及び「hondo」が引き受けたことが分かる。また、〈時間的意味 (T)〉が「alto」で表現されるこ

とに、日本語母語話者は違和感があるかもしれないが、「高い」と「深い」の両方の意味を担っていた「ALTUS」から「alto」に通時的に継承された意味であると考えれば納得であろう。この〈時間的意味 (T)〉と、「alto」に潜在的に備わった空間性とスケール性に基づく〈次元的意味 (D)〉・〈位置の描写 (F)〉・〈度合いの拡張 (C)〉の関係は、スペイン語辞書 PLANETA の記述にも反映されている。PLANETA では、四つの〈次元的意味〉・〈度合い的意味〉の用法と、「過去」や「深夜」の時間の経過性を表す二つの〈時間的意味〉の用法に大きく分けて意味が描かれている。

以上、「alto」の通時の意味変化を通して獲得されてきた多義の構成をみてきた。文法と意味の関係についてまとめると、(39) から (41) のようになる。

- (39) 表す意味：「alto」は、〈次元的意味〉のほかスケール性に基づく多義を持ち、時間スケールにも適応される。
- (40) 表現の用法：「alto」には叙述用法と修飾用法があり、修飾用法には前置修飾と後置修飾がある。
- (41) 表現の文法的制約：「alto」には、意味表出に関わる文法的制約はない。

4. 日本語とスペイン語の高さを表す語の対応関係

前節でスペイン語の高さを表す語「alto」が〈次元的〉な上方向への際立ちのほか、「夜」や「過去」などの〈時間の経過性〉をも表すことをみてきた。対して、日本語では「夜」などの〈時間の経過性〉の度合いは「深い」で、「過去」などの〈時間の経過性〉の度合いは「遠い」で表される。「高い」、「深い」、「遠い」は、いずれも次元的な際立ちを表す形容詞であるが、日本語とスペイン語の間で表現様式が非対応になっている。本節では、日本語とスペイン語の高さを表す語の対応関係をまとめる。

「高い」と「alto」の意味を対照し、その対応関係をまとめるにあたって、「意味のネットワーク」を援用したい。Langacker (2013) によれば、意味の概念化では認知活動に加え、社会的な知識や慣習的で文脈依存的な知識の蓄積がなされている。多義が程度差はあれど慣習化された複数の意味だと考えると、その度合いによっていくつかのより中心的ないし典型的なものと、派生的なものとのカテゴリー関係を形成し、ネットワークで結びついていると想定できる。意味について論じるとき、いくつかの意味に区別されるかということと、どれだけの情報をその語が内包しているか、という二つの大きな問題に直面するが、これらを解消してくれるのが意味のネットワークである。多義について考える際に、意味ネットワークを想定することの利点を、図2の「ring」のネットワークを例に概観する。図2では、中心にある「円形の存在物」から「丸印」、「円状の物体」、「円状の装身具」に概念が組織化されていることが直線矢印で示されている。点線の矢印では、基本義「円形の存在物」から「(内密に) 協働する人のグループ」と「競技場」に意味拡張が起きていることが示されている。また、太枠「円状の物体」は「丸印」、「競技場」にも拡張の派生を伸ばしている。語義を囲む枠の太さは意味のプロトタイプ性を表しており、「円状の物体」と「円状の装身具」のプロトタイプ性の高さが示されている。複数の動機づけを得たリンク

で結びつけられたネットワークで多義を描写することの利点に、「ring」が「輪ゴム」を表さないことを描かないことで示せることが挙げられる。「輪ゴム」が「円状の物体」に含まれないことは、「円状の物体」の円形がたゆまないという定義づけを行うことで排除することができよう。多義を関係し合う意味として考えることで、意味同士を類推可能な関係として記述説明するのにとどまらず、持っている意味をカバーし、持っていない意味を排除することができる。

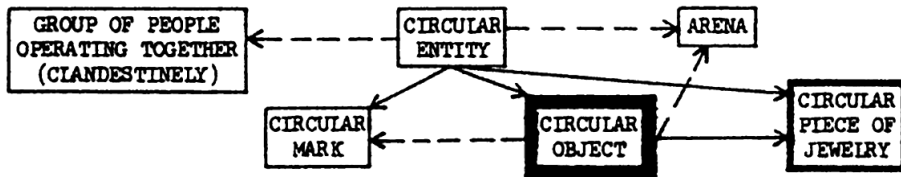


図2 「ring」のネットワーク (Langacker 1991: 3 Figure 1)

本稿では、スペイン語と日本語の高さを表す表現の多様さを見比べる目的から、認知言語学の知見に則り、言語学的な意味と文脈に依存する非言語的な意味を厳密に分け隔てず、「高い」と「alto」の形容詞の意味用法をネットワーク図に示す(次頁図3)。本来、ネットワーク図は語の意味のプロトタイプ性や派生関係を枠線の太さや矢印の線形で描くものであるが、本研究はそれぞれの語の意味派生や語義のプロトタイプ性について論じることが目的ではないため、これらは図示しない。便宜的に、「alto」と「高い」の意味でそれぞれに共通して用いられるものは太枠線で、それぞれに特有に用いられるものは、日本語特有の意味を細線で、スペイン語特有の意味を点線で示す。繰り返しになるが、中心的意味の議論や派生関係について本稿では論じない。なお、日本語では接頭辞「高」を用いて「高速」などの名詞が生成されるが、「*速度が高い」、「*高い速度」のように該当の名詞を形容詞「高い」で叙述・修飾できない場合には、名詞に個別に獲得された用法と考え、形容詞の意味としない。統語情報・形態情報・意味情報・慣用表現について、用例とともに詳細に記述する計算機用日本語基本辞書『IPAL』によれば、叙述用法と修飾用法で用いられる被修飾名詞は非対称をなす(橋本・青山 1992)。本研究では、一方の言語で叙述用法か修飾用法のいずれかに該当の形容詞が用いられ、もう一方の言語で叙述用法にも修飾用法にも用いられない場合に、一方の言語に特有の意味が表されると判定する。

図3では被修飾名詞の性質に関係なく、「高い」と「alto」が対象の何を表しているかに焦点を当て、意味を描いている。例えば、「関心」などの抽象的な名詞も「点数」などの数えられる名詞も〈数・量が多い〉ことが「高い」で表されるが、このような名詞の性質の区別を反映しない。

それぞれの言語に特有な意味について、いくつか説明を補足しておく。「alto」は「precio(値段)」を修飾し〈高価〉なことを表すが、日本語の「高い」のようにそれ自体が〈高価〉の意味を持つとは考えられない。これは、日本語の「低い」がスケール性への準拠から「価格が低い」とはいうが、「*野菜が低い」とはいわないことと似ている。「温度」などが〈度合い〉を表すように「価格」という語が価値の度合いになっているのであり、〈価値の少なさ〉が「低い」の意味であるとはいえない。「alto」でも「*perfumes altos (*perfume high) (高い香水)」という表現で香水の〈高

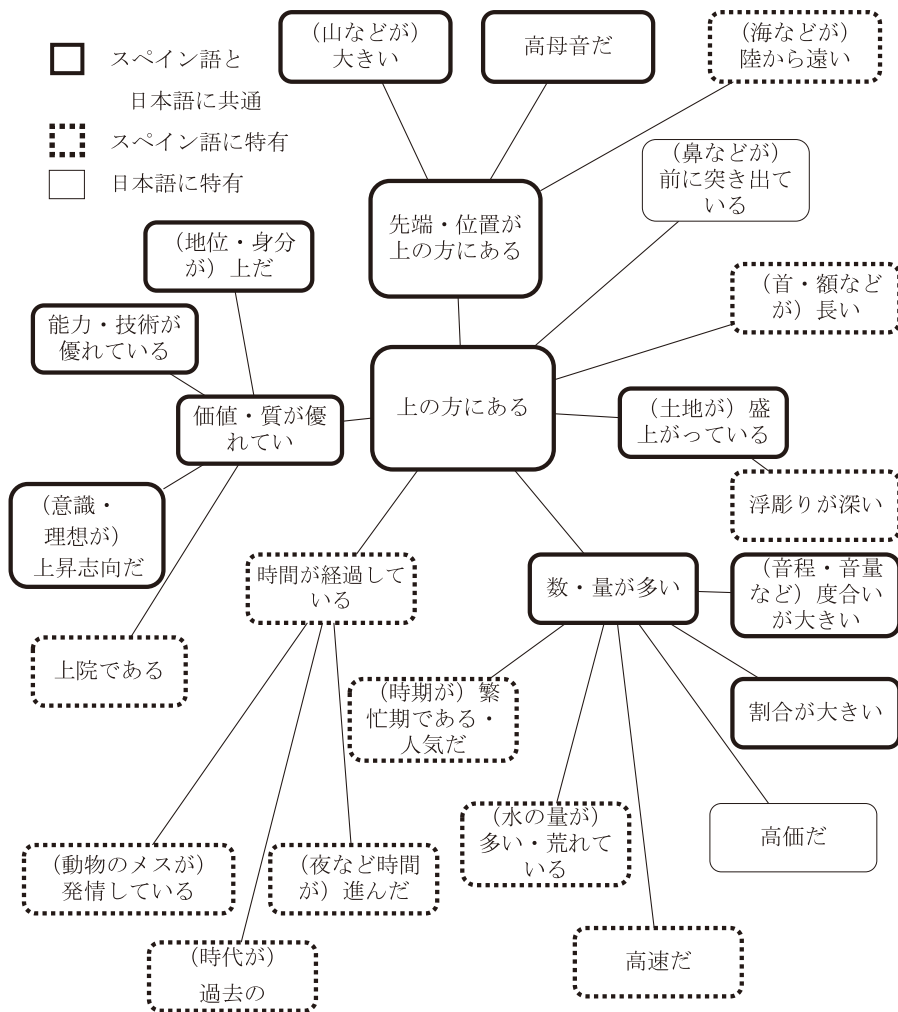


図3 「alto」と「高い」の対照ネットワーク

価) さを表すことはできず、「低い」と同様のことが起きていると考えられる。このことから、〈高価〉は「alto」にはない、「高い」が特有に持つ意味であるといえる。

また、「音」や「温度」などの度合いを表すとき、対象を〈高低〉の尺度に見立てるという点でスケール性に準拠しているのと同様に、「質」や「地位」、「時間」もそれぞれの尺度における位置を表しており同じ派生の経路をとるものと考えられるが、その対象は「高い」と「alto」で異なっている。「質」や「地位」などは、どちらの言語でも「高い」、「alto」で表されるのに対して、「時間」や「速さ」のスケールが「alto」で表されるのはスペイン語に独特である。

なお、形容詞の意味用法を示すことを前述したが、副詞として使われる「alto」や、(42) のような名詞「alta (退院許可・登録証など)」の用法、「pasarse por alto (*pass for high) (見落とす)」や「por todo lo alto (*by all NART high) (盛大に)」のような慣用句、(43) のような間投用法といっ

た形容詞用法以外の「alto」の意味はネットワーク図に書き加えていない。

- (42) Unos días después a Ernesto lo dieron de alta
 ART N.days PREP.after PREP.to N.Ernesto PRN.him V.IND.3.PL.PST.give PREP.of N.height
 y se fue a su casa.
 CNJ.and V.REFL.IND.3.SG.PST.go PREP.to DEM.his N.home

数日後にはエルネストに退院許可が下りて、彼は自宅に戻った。

(Bolaño. *Los detectives salvajes* p. 280)

- (43) Eh, eh, alto ahí, replicó Satanás, ...
 INTJ.hey INTJ.hey INTJ.stop ADV.there V.IND.3.SG.PST.reply N.Satan

おい、いい加減に黙れ、とサタンは答えた、 (Mendoza. *La ciudad de los prodigios* p. 250)

ネットワークモデルを援用し日本語学習者に向けて多義語を解説する教材に、今井（2011）がある。この『日本語多義語学習辞典：形容詞・副詞編』では、「高い」の項目で「ハードルが高い」を例に、「高い」に〈難しい〉という意味を設定している。実際には、「ハードル」が難易度の指標として難しさの意味を担っており、「高い」が「難しい」という意味を備えているわけではない。教育的な観点から、「敷居が高い」に並ぶ日本語の慣習的な表現として紹介しており、読み手の実用に結びつく用法の解説になっている。Sato（1990）によれば、読み手の利益が考えられた辞書の意味解説と、言語学的な語義そのものとは一致しない。辞書は、読み手に必要な知識を提供する目的から音声の特徴・語源・用法・統語機能・意味など語の様々な特性を教えてくれるもので、意味を厳密かつ正確に記述するものではないためである。また、一つの意味として数えられているものが意味論的に妥当な意味の境界であるとは限らず、意味の境界の問題を正当化してくれるものでもない。本節では、両方の言語で用いられる意味を特定し、一方の言語に特有な意味を図示することで対照による意味の境界を示した。

5. 調査と分析：「alto」と「高い」の使われ方

日本語とスペイン語では、文法的特性・意味用法のタイプが全く異なることをみてきた。より多様な表現を有する言語から眺めることが多角的な分析に有効であると考えられるため、表す意味・表現の位置・表現の文法的制約の多様さを比較し、観察の軸とする言語を定める。まず表す意味は、差異はあるものの、いずれも〈次元性〉を中心に、スケール性に基づく多義を持つものであった。表現の位置は、スペイン語には叙述用法・修飾用法のほかに、修飾用法に前置用法と後置用法の二つのパターンがあるが、これはスペイン語文法に独特の用法であり一般的ではなく、他の言語と比較するにあたって対応関係がみえない。また、「alto」に特別な用法でもない。対して文法的制約では、「高い」の多義の表出に二重主語構文の制約がある。二重主語構文自体は、日本語の形容詞一般に用いられる構文であるが、意味の表出の制限がある形容詞はその全てではない。また、助詞句の補完自体はスペイン語にも同様の用法があり、「cercano a... (close to...) (…に近い)」「amable con... (²²kind with...) (…に親切的な)」「lleno de... (full of...) (…でいっぱい)」

「rico en... (rich in...) (…が豊かな)」など限られた形容詞で助詞句を明示する用法がある。ただし、「alto」にはこの用法がない。「alto」と「高い」の意味用法を比較すると、「alto」の用法が一般的な形容詞の用法に限られているのに対して、「高い」は二重主語構文が義務的な場合があり、多様であるといえる。以上のことから、二つの言語についての対照研究を行うにあたって、より多様な表現形式を有する現代日本語を軸に、スペイン語との対照を行うこととする。

さらに、両言語に共通する枠組みで対照することで違いが見えやすいと考え、それぞれの言語に中心的で一般性がある叙述用法と修飾用法での用いられ方を観察する。

5.1 対訳本の調査

日本語の小説5冊とそのスペイン語訳5冊、スペイン語の小説5冊とその日本語訳5冊の合計20冊を対象に、「alto」と「高い」の用いられ方を調べた。スペイン語「alto」が使われている163例と、日本語「高い」が使われている152例の使用状況を、次にまとめる。なお、調査対象は形容詞に限り、日本語の「小高い」「甲高い」などの複合語や「高価」などの一語化した名詞は除いている。また、副詞用法も観察対象から除いた。「alto」も、名詞用法や副詞用法を取り除き観察した。ただし「resultar (turn out)」や「aparecer (appear)」などにつく「alto」は厳密には副詞用法だが、被修飾名詞を叙述する点で形容詞の叙述用法と同様の使い方がされているものとみなし、観察対象から除いていない。

では、両言語に共通する一般的な用法である叙述用法と修飾用法の使われ方をみていこう。表3は、5作のスペイン語小説と5作の日本語小説のスペイン語訳本から「alto」を抽出したとき、「alto」が「高い」に対応しているものと「高い」が使われず対応していなかったものの用法の別を「alto」の列に示している。また、5作の日本語小説と5作のスペイン語小説の日本語訳本から「高い」を抽出し、「高い」が「alto」に対応しているものと、「alto」が使われず対応していなかったものの用法の別を「高い」の列に示している。なお「alto」や「高い」が使われずに訳され、訳が非対応だった用例は、動詞で訳されていたり副詞で訳されていたり対応する訳がなかったりしたもので、用法の対応関係を示していない。

表3 「alto」と「高い」の訳の対応と、用法の別

抽出した語		alto	高い
用法の別			
「alto」と「高い」 で訳が対応	どちらの言語でも修飾	36	36
	どちらの言語でも叙述	24	24
	「alto」が修飾で「高い」が叙述	8	8
	「alto」が叙述で「高い」が修飾	4	4
訳が非対応	抽出された形容詞が修飾	78	34
	抽出された形容詞が叙述	13	46
合計		163	152

表中の「[alto]と「高い」で訳が対応」している行では、対訳本間で訳が対応しているため、「alto」列と「高い」列で件数が同じ数になっている。

表3で示した対応する用法の件数の内容を次にみていく。形容詞表現に一重線を、被修飾名詞に波線を引いている。出典は原著作品のみを記している。

どちらの言語でも修飾

- (44) そして車はものすごく背の高い いちよう並木がずっと続いているところで止まった。

Nishiyama detuvo el coche ante una avenida en la
N.Nishiyama V.IND.3.SG.PST.stop ART N.car PREP.in front of ART N.avenue PREP.in ART
que se sucedían hileras de altísimos ginkgos.
RPRN.what V.REFL.IND.3.PL.PST.follow N.lines PREP.of ADJ.ABSP.high N.ginkos

(吉本ばなな『デッドエンドの思い出』 p. 222)

- (45) Para protegerse de la mirada de los extraños un
PREP.for V.INF.REFL.protect PREP.of ART N.look PREP.of ART N.strangers ART
muro altísimo se levanta alrededor de la propiedad.
N.wall ADJ.ABSP.high V.REFL.IND.3.SG.PRS.rise up ADV.around PREP.of ART N.property

好奇の目から身を守るために、地所の周囲にはとてつもなく高い 塀が建てられる。

(Bolaño. *Los detectives salvajes* p. 424)

どちらの言語でも叙述

- (46) 博士の名前を発見する確率は高かった。

La probabilidad de dar con el nombre del profesor
ART N.probability PREP.of V.INF.give PREP.with ART N.name PREP.of-ART N.professor
era alta.
V.IND.3.SG.PST.be ADJ.high

(小川洋子『博士の愛した数式』 p. 208)

- (47) Cuando el tren partió el sol estaba ya
RADV.when ART N.train V.IND.3.SG.PST.leave. ART N.sun V.IND.3.SG.PST.be ADV.already
alto;
ADJ.high

列車が発出したときは、日はもう高かった。(Mendoza. *La ciudad de los prodigios* p. 300)

「alto」が修飾で「高い」が叙述

- (48) お風呂とトイレは別々で、天井も高かった。

La bañera y el lavabo estaban en cuartos diferentes
ART N.bath tub CNJ.and ART N.toilet V.IND.3.PL.PST.be PREP.in N.rooms ADJ.different

y el piso era de techos altos.
 CNJ.and ART N.apartment V.IND.3.SG.PST.be PREP.of N.ceilings ADJ.high

(吉本ばなな『デッドエンドの思い出』 p. 15)

- (49) era un hombre de unos cuarenta años, alto y
 V.IND.3.SG.PST.be ART N.man PREP.of ART ADJ.forty N.years ADJ.high CNJ.and
 delgado, de facciones rudas, campesinas, no desagradables;
 ADJ.slim PREP.of N.factions ADJ.rude ADJ.rural NEG ADJ.unpleasant

男は四十歳くらいで、痩せて背が高く、田舎者のいかつい容貌をしていたが、けっして不愉快な顔ではなかった。
 (Mendoza. *La ciudad de los prodigios* p. 355-356)

- (50) su mejor amigo, un tipo muy alto, rubio, que
 DEM.his ADJ.best N.friend ART N.type ADV.very ADJ.high ADJ.blonde RPRN.what
 casi nunca abría la boca y que
 ADV.hardly ADV.never V.IND.3.SG.PST.open ART N.mouth CNJ.and RPRN.what
 seguía a Arturo a todas partes.
 V.IND.3.SG.PST.follow PREP.to N.Arturo PREP.to ADJ.every N.parts

彼の親友で、とても背が高くて金髪で、ほとんど口を開かない、アルトウーロにいつもくっついて歩いていた。
 (Bolaño. *Los detectives salvajes* p. 147)

「alto」が叙述で「高い」が修飾

- (51) 黒い薄手のコートを着た、背の高い男だった。

Era alto y llevaba un fino abrigo de
 V.IND.3.SG.PST.be ADJ.high CNJ.and V.IND.3.SG.PST.wear ART ADJ.slim N.coat PREP.of
 color negro.
 N.colour ADJ.black

(東野圭吾『容疑者 X の献身』 p. 92)

- (52) era alta, joven, pálida, distinguida.
 V.IND.3.SG.PST.be ADJ.high ADJ.young ADJ.pallid ADJ.distinguished

背が高く若く青白い、気品のある女性だった。
 (Cercas. *Soldados de Salamina* p. 181)

一方の言語で叙述用法が用いられており、もう一方の言語で修飾用法が用いられていたとき、(51) (52) のように被修飾名詞がどんなものか羅列的に描写するのに、日本語では修飾用法が、スペイン語では叙述用法が用いられる文脈の特徴がみられた。対して、対象の部分的な説明や印象を述べるような場面では、(49) (50) のように日本語では叙述用法で、スペイン語では修飾用法が用いられていることがみて取れた。なお、いずれも 10 件に満たない用例の所見に過ぎない。

表 3 の訳が非対応の行では、「alto」の修飾用法が 78 件と多く、目立っている。異なり語数は

50 件であり、このことから「alto」が修飾用法で「高い」に対応しない様々な用法を表していることが読み取れる。

以上の用法の別が、いずれの言語を起点としてどれだけ用いられていたかを表 4 にまとめた。両言語で、起点の言語表現にどのように訳本が対応していたか、その方向性を示すことが目的である。表中の「「alto」と「高い」で訳が対応」している行の「西語」の列の数値は、スペイン語が原著の作品で「alto」が用いられ、日本語に訳されている件数である。「日本語」の列の数値は、日本語が原著の作品で「高い」が用いられ、スペイン語に訳されている件数である。「訳が非対応」の行の「西語」の列の数値は、スペイン語が原著の作品で「alto」が、「日本語」の列の数値は日本語が原著の作品で「高い」が用いられていた件数である。また、「西語訳」の列では日本語作品のスペイン語訳本で「alto」が用いられた件数を、「日本語訳」の列ではスペイン語作品の日本語訳本で「高い」が用いられていた件数を示している。

表 4 原著と訳本における「alto」と「高い」の用法の別

用法の別		抽出した語 作品		alto		高い		総和
				西語	西語訳	日本語	日本語訳	
「alto」と「高い」で訳が対応	どちらの言語も修飾			30		6		36
	どちらの言語も叙述			13		11		24
	「alto」修飾「高い」叙述			5		3		8
	「alto」叙述「高い」修飾			1		3		4
訳が非対応	修飾用法			60	18	16	18	112
	叙述用法			3	10	21	25	59
合計				112	28	60	43	243

「alto」と「高い」で訳が対応しており修飾用法が用いられていた例は、スペイン語が原著の作品から多く抽出されていたことがわかる。また、訳が非対応の場合に「alto」の修飾用法が多かったが、その多くはスペイン語の原著作品から抽出されたものだった。さらに、「alto」が抽出された叙述用法の多くは、日本語が原著の作品からスペイン語に訳されたテキストから抽出されたものであったこともみて取れる。

なお日本語では、形容詞としては修飾用法であっても、「野田先生はやさしい先生です。」のように述語として働く場合がある。本研究では形容詞に着目した用法の数え方を採用したが、文の大きな構造に着眼し数えなおせば、叙述用法に数えられる「高い」の用例は表 3 と表 4 で示した件数からさらに増えると思われる。

5.2 分析：換喩現象の観点から

本節では、訳が非対応だった例について考察を深めたい。考察にあたって、分析の観点に取り上げる換喩現象を紹介する。Langacker (1993) などの認知言語学的研究により、換喩 (metonymy) が単なる詩的表現や説得術のために使われる文飾ではなく日常言語に遍在していること、また人

間の基本的な認知能力の現れであり、様々な文法現象に反映されていることが明らかにされてきた。西村（2002）では、与格交替・場所格交替・tough 構文などの文法現象の成立に統一的に換喩が関わっていることが示されている。

伝統的に近接や隣接と呼ばれるこの現象では、Xを指示する表現がXと密接に関係するYを示すのに用いられる。このXとYとの間に成立する関係は多様であり、慣習の程度によらず、日常的な言語使用に満ち溢れている（西村 2002）。(53) から (55) の例も換喩現象の現れとされ、換喩が日常言語で一般的に使用されていることがわかる。(53) は、X（村上春樹本人）とY（村上春樹の作品）の間に密接な関係があるという知識を話し手と聞き手が共有していることで成立する。(54) のような題述関係は、参照点現象の一種であるとされる。題述関係、すなわち二重主語構造も主題が関連する部分が解釈されるべき知識の領域を喚起する換喩的な用法である（Langacker 1993, 尾上・木村・西村 1998）。(55a) は「difficult」が問題の行為の難易度を表すのに対して、(55b) では同じ形容詞で行為を困難にさせる原因となる特性を対象が備えていることを表している。この二つの用法の関係も、行為に属性を認める因果関係で成立している換喩現象である（Ikeya 1996, 篠原 1997, 西村 2002）。

(53) 村上春樹ばかり読んでいる。

(54) 魚は鯛がおいしい。

(55) a. It is difficult to read this book.

b. This book is difficult to read.

認知言語学において換喩が注目されているのは、日常言語に偏在する換喩現象が特定の言語に特化しない一般的な認知能力の現れだと考えられるためである。本研究では、この現象を観点に「alto」と「高い」の言語間の表現仕様の差異の説明を試みる。ひいては換喩による文法と意味の関わりが、異なる言語間の形容詞用法に存在することを示唆する。

ここまで「高い」と「alto」の運用に関して、大きく次の二点がみて取れることを論じてきた。

(56) 「高い」の表現の運用：換喩現象である二重主語構文によって多義の表出がコントロールされる。

(57) 「alto」の表現の運用：名詞修飾用法による多義の表出が特化している。

「alto」は、日本語の二重主語構文に相当する前置詞句を補完する表現用法を持たず、被修飾名詞としてのYを指示するのに、Yと密接に関係するXを修飾することで対象の〈次元の意味〉ないしスケールに準拠する意味を表せる。また、(58) (59) のように修飾用法で慣習表現を作りやすく、名詞句でひとまとまりの意味用法を獲得しやすいため、修飾用法による多義の表出が特化していると考えられる。

(58) una alta tolerancia al alcohol

ART ADJ.high N.tolerance PREP.to-ART N.alcohol (たくさんのアルコール分解酵素)

- (59) alta mar
ADJ.high N.sea (沖)

助詞句を補完する用法は、「高い」に限定されるものではない。(60a) の例では、「近い」を「似ている」という意味で解釈することが可能である。例えば、「このペンは昔父親が使っていたペンに近い。」「このペンは Lamy に近い。」のように「このペン」に比較される任意の対象が想起される。ペンの場所について述べるためには、(60b) のように場所を二格によって明示する必要がある。また、スペイン語でも (61) (62) のように前置詞句による部分や属性の明示を要する場合がある。言語によって表現形式が異なるものの、換喩現象を媒介した文法表現による多義の表出がなされているといえよう。

- (60) a. [?] このペンは近い。 b. このペンは手元に近い。
(61) cantidad cercana a un billón de yenes
N.sum ADJ.nearby PREP.to ART N.billion PREP.of N.yen (一兆円に近い金額)
(62) los ojos llenos de lágrimas
ART N.eyes ADJ.full PREP.of N.tears (涙でいっぱい目)

6. 類型論的傾向

文法的には、日本語の形容詞は動詞と同様の形態カテゴリーで活用することから、動詞の下位に分類される(松本 1998)。対して、スペイン語の形容詞はそのほかの印欧言語と同様に性数の文法カテゴリーによって曲用するため、名詞の下位分類として扱われる。

八亀(2008)によれば、日本語の形容詞の基本的な機能として「規定語」と「述語」があるほか、(63) のようにコピュラを伴わずに単独で述語になったり、(64) のように名詞を修飾していても名詞を指し示すことで述語として機能したりできる。シナリオや小説などの会話文では、述語として機能することが圧倒的に多い(八亀 2008: 63)。

- (63) 充「卵、あったかいね」 (中島丈博「あ、春」p. 10, 『99 年鑑代表シナリオ集』
シナリオ作家協会(編) 映人社, 2000)

- (64) 野田先生はやさしい先生です。

本研究では「高い」と「alto」の多義を概観し、対訳本の調査から用法の対応関係を観察し、スペイン語の修飾用法の際立ちを指摘した。日本語の形容詞では、「高い」のように意味の表出に格の補完を要するタイプがあるのに対して、スペイン語では助詞句の補完を要する表現は限られており、「alto」のように結合する名詞にその意味表出の条件づけを任せられることもある。これらの現象が両言語にかかる換喩の文法特性から統一的に説明できることを提言した。形容詞における日本語の叙述傾向と印欧語の修飾傾向(仁田 1998, 八亀 2008)に、この多義表出の条件が関わっていると考えられる。

グロス

1, 2, 3: 1 st , 2 nd , 3 rd person	1, 2, 3 人称	NEG: negation	否定 (辞)
ABSP: absolute superlative	絶対最上級	PL: plural	複数
ADJ: adjective	形容詞	PREP: preposition	前置詞
ADV: adverb	副詞	PRN: pronoun	代名詞
ART: article	冠詞	PRS: present	現在
CNJ: conjunction	接続詞	PST: past	過去
DEM: demonstrative	指示詞	RADV: relative adverb	関係副詞
IND: indicative	直接法	REFL: reflexive	再帰
INF: infinitive	不定詞	RPRN: relative pronoun	関係代名詞
INTJ: interjection	間投詞	SBJ: subjunctive	接続法
N: noun	名詞	SG: singular	単数
NART: neutral article	中性冠詞	V: verb	動詞

参考文献

- Dixon, Robert Malcolm Ward (2004) Adjective classes in typological perspective. In: Robert M. W. Dixon and Alexandra Yurievna Aikhenvald (eds.) *Adjective classes: A cross-linguistic typology*, 1–49. Oxford: Oxford University Press.
- Demonte, Violeta (1999) El adjetivo: clases y usos. La posición del adjetivo en el sintagma nominal. *Real Academia Española. Gramática descriptiva de la lengua Española* 1: 129–215. Madrid: Espasa.
- Hanssen, Federico (1913) *Gramática histórica de la lengua castellana*. Leipzig: Halle.a.S., Max Niemeyer.
- 橋本三奈子・青山文啓 (1992) 「形容詞の三つの用法：終止，連体，連用」『計量国語学』18(5): 201–214.
- 服部四郎 (1968) 「高イ，低イと high, tall; low, short」『英語基礎語彙の研究 ELEC 言語叢書』119–124. 東京：三省堂.
- Ikeya, Akira (ed.) (1996) *Tough constructions in English and Japanese: Approaches from current linguistic theories*. Tokyo: Kurosio Publishers.
- 国広哲弥 (1970) 「日本語次元形容詞の体系」『言語の科学』2: 13–26.
- 国広哲弥 (1982) 『意味論の方法』東京：大修館書店.
- 久島茂 (2001) 『《物》と《場所》の対立—知覚語彙の意味体系—』東京：くろしお出版.
- Langacker, Ronald Wayne (1991) *Concept, image, and symbol: The cognitive basis of grammar*. Berlin: Walter de Gruyter and Co.
- Langacker, Ronald Wayne (1993) Reference-point constructions. *Cognitive Linguistics* 4: 1–38.
- Langacker, Ronald Wayne (2013) *Essentials of cognitive grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Luján, Marta (1980) *Sintaxis y semántica del adjetivo*. Madrid: Cátedra.
- 松本克己 (1998) 「形容詞の品詞的タイプとその地理的分布」『言語』27(3): 18–25.
- 宮島達夫 (1962) 「空間的な量をあらわす形容詞」『言語研究』41: 100–101.
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』東京：明治書院.
- 西村義樹 (2002) 「換喩と文法現象」西村義樹 (編) 『シリーズ言語科学 2 認知言語学 I：事象構造』285–311. 東京：東京大学出版会.
- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』(国立国語研究所報告 44) 東京：国立国語研究所.
- 西内沙恵 (2016) 「現代日本語における知覚形容詞「高い」の意味基準に関する一考察—場所名詞の観点から—」『日本認知言語学会論文集』16: 467–473.
- 西内沙恵 (2017) 「現代日本語における次元形容詞の意味表出」『日本認知言語学会論文集』17: 409–415.
- 仁田義雄 (1998) 「日本語文法における形容詞」『言語』27(3): 26–35.
- 野矢茂樹 (2011) 『語りえぬものを語る』東京：講談社.

- 奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論』 東京：大修館書店。
 尾上圭介・木村英樹・西村義樹 (1998) 「二重主語とその周辺」『言語』 11: 90-108。
 Sato, Kunihiro (1990) Observaciones sobre la significación general de alto. 『スペイン語学研究』 5: 69-88。
 篠原俊吾 (1997) 「形容詞・行為・責任」『教養論叢』 106: 43-59。
 鈴木孝夫 (1967) 「天狗の鼻はなぜ高い」『言語生活』 191: 66-89。
 田窪行則 (1984) 「現代日本語の「場所」を表す名詞類について」『日本語・日本文化』 12: 89-115。
 寺村秀夫 (1968) 「日本語名詞の下位分類」『日本語教育』 12: 42-57。
 八亀裕美 (2008) 『日本語形容詞の記述的研究：類型論的視点から』 東京：明治書院。

参照辞典・辞書

- DEA Seco, M., Andrés, O. y Ramos, G. (2005) *Diccionario del español actual*. 3ªed. Madrid: Grupo Santillana de Ediciones.
 DRAE Real Academia Española (2001) *Diccionario de la lengua española*. 22ªed. Madrid: Espasa-Calpe.
 飛田良文・浅田秀子 (1991) 『現代形容詞用法辞典』 東京：東京堂出版。
 今井新悟 (2011) 『日本語多義語学習辞典：形容詞・副詞編』 東京：アルク。
 IPAL 『計算機用日本語基本辞書』 情報処理振興事業協会 (IPA)
 PLANETA Marsá, F. (1987) *Diccionario Planeta de la lengua española usual*. 4ªed. Barcelona: Editorial Planeta.

関連 Web サイト

- 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/ (2017年7月15日確認)

調査資料体【原著の小説とその訳】

- Bolaño, Roberto (1998) *Los detectives salvajes*. Barcelona: Editorial Anagrama.
 ボラーニョ・ロベルト (2010) 『野生の探偵たち (上) (下)』 柳原孝敦・松本健二 (訳) 東京：白水社。
 Castellanos Moya, Horacio (2006) *Desmoronamiento*. Barcelona: Tusquets Editores S.A.
 カステジャーノス・モヤ・オラシオ (2009) 『崩壊』 寺尾隆吉 (訳) 東京：現代企画室。
 Cercas, Javier (2001) *Soldados de Salamina*. Barcelona: Tusquets Editores S.A.
 セルカス・ハビエル (2008) 『サラミスの兵士たち』 宇野和美 (訳) 東京：河出書房新社。
 東野圭吾 (2005) 『容疑者 X の献身』 東京：文藝春秋。
 Higashino, Keigo (2011) *La devoción del sospechoso X*. Barberán, Francisco (訳) Barcelona: Ediciones B, S.A.
 片桐恭一 (2006) 『世界の中心で愛をさけぶ』 東京：小学館。
 Katagiri, Kyoichi (2008) *Un grito de amor desde el centro del mundo*. Porta, Lourdes (訳) Madrid: Alfaguara.
 川上弘美 (2006) 『真鶴』 東京：文藝春秋。
 Kawakami, Hiromi (2013) *Manazuru*. Montaña Bornas, Marina. (訳) Barcelona: Quaderns Crema, S.A.U.
 Mendoza, Eduardo (1986) *La ciudad de los prodigios*. Barcelona: Editorial Seix Barral S.A.
 メンドサ・エドゥアルド (1996) 『奇蹟の都市』 鼓直・篠沢真理・松下直弘 (訳) 東京：国書刊行会。
 小川洋子 (2003) 『博士の愛した数式』 東京：新潮社。
 Ogawa, Yoko (2008) *La fórmula preferida del profesor*. Sugiyama, Yoshiko & Ferrer Jiménez, Héctor (訳) Madrid: Editorial Funambulista.
 吉本ばなな (2003) 『デッドエンドの思い出』 東京：文藝春秋。
 Yoshimoto, Banana (2011) *Recuerdos de un callejón sin salida*. Martínez Álvarez, Gabriel (訳) Barcelona: Tusquets Editores S.A.
 Zafón, Carlos Ruiz (2001) *La sombra del viento*. Barcelona: Editorial Planeta S.A.
 サフォン・カルロス・ルイス (2006) 『風の影 (上) (下)』 木村裕美 (訳) 東京：集英社文庫。

Dimensional Adjectives in Spanish and Japanese: Comparing the Use of *alto* and *takai*

NISHIUCHI Sae

Adjunct Researcher, Theory & Typology Division, Research Department, NINJAL

Abstract

This study presents a contrastive analysis of the use of dimensional adjectives in Spanish and Japanese, based on an examination of phrases containing Spanish *alto* and Japanese *takai* (both meaning ‘tall’ in English) in a translation corpus. The goal of the analysis is to determine how these two languages disambiguate polysemous adjectives when a dimensional meaning is intended. The results suggest that Japanese uses grammatical modification and descriptive strategies that are absent from Spanish: for example, the use of a double subject sentence structure in *kanojo wa se ga takai* (N.she TOPIC N.height NOM ADJ.tall; ‘She is tall’). The equivalent without the case supplement *kanojo wa takai* (N.she TOPIC ADJ.tall) instead means ‘she is expensive,’ indicating that both associated nouns and the properties of the case supplement help to disambiguate senses. However, such a structure is not required in Spanish *alto*, as is clear when comparing *Ella es alta* (3.SG.she V.IND.3.SG.PRS.be ADJ.tall. ‘She is tall’) with **ella tiene estatura alta* (3.SG.she V.IND.3.SG.PRS.have N.height ADJ.tall). We conclude that, while Japanese uses grammatical structure to disambiguate polysemous adjectives, Spanish uses modification strategies to distinguish between meanings.

Key words: dimensional adjectives, polysemous, contrastive analysis of Spanish and Japanese language, double subject sentence, metonymy